

『万葉集』 相聞歌の一位相

—— 相手を「人」と呼ぶ歌の分布を通して ——

駒 木 敏

一 はじめに

万葉集の相聞歌は〈我と汝〉の世界の表現であるといわれる。そのことを象徴的に示すのは、二人称呼称詞の現れ方である。つまり、お互いの対偶関係を〈妹・子・背・君〉などの語で把握し、第三者の入り込む余地のない世界を構築するのが相聞歌の表現の世界に他ならない。

万葉の相聞歌に即して呼称詞の表われを精査された伊藤博氏の「相手を呼ぶことば」によれば、「相手を『人』と呼ぶ歌は初期万葉と東歌には一首もない^①」とされる。つまり、相聞歌ではお互いを呼ぶことばは「直接的呼称」(汝・妹・背・君・子など)が一般的であるのに対して、他方「『人』という抽象的客体的表現」(「客観的呼称」)が巻四・十一・十二などの奈良朝歌群に目立ってきており、

恋歌の趣向の変化と対応するというのである^②。その後、伊藤論が「直接的呼称」と総括した実体について、品田悦一氏は「自己中心的呼称」(妹・背)と「社会中心的呼称」(君・子)との二つの位相に分け、その具体的様相を分析することによって、呼称表現が和歌の表現の自立、自覚と共に展開するありようについて示された^③。小稿は、右に伊藤論が指摘した、相聞歌において相手を「人」と呼ぶことの意味について若干の考察を試みる。「抽象的客体的表現」である「人」の語が対偶する相手を指して用いられることは、一見相聞歌に馴染まないかに見える。しかし、万葉の第二期以降には、その用法は増えていく。相手を「人」と呼ぶ歌もまた、「自己中心的呼称」や「社会中心的呼称」をもってやりとりされた歌群に交差して、相聞歌のあり方の一面を担っていたと思われる。

二 人麻呂関係歌における「人」

前掲の伊藤論の指摘のとおり、相聞歌において相手を「人」と呼ぶ例は初期や東歌には見られず、比較的早いものが人麻呂歌集である。次に掲げる三首で、いずれも略体表記の歌である。

ア 大野らに小雨降りしく木の下こもとによりより寄り来こ我が思ふ人
(11・二四五七、歌集／略体)

イ たまさかに我が見し人をいかにあらむよしをもちてかまた
一目見む(11・二三九六、歌集／略体)

ウ 磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人に知らえず恋ひ渡るか
も【或本の歌に曰く、「岩の上に立てる小松の名を惜しみ人
には言はず恋ひ渡るかも】(12・二八六一、歌集／略体)

アについては、歌い手の性別の理解に二つの立場がある。茂吉『評釈』に「人」は女のこと、妹、吾妹などと同じ意味に帰着するのだが、第三人称らしくヒトといつてゐる」としたが、澤瀉『注釈』、稲岡『全注卷十一』に女性が男性を誘う歌としている。上二句ないし三句を序詞と解するか否かを含めて問題を残しているが、集団的な場における誘い歌風の口吻を感じさせる対詠的な歌といつてよいであろう。

この歌は、男女いずれの歌にせよ、自分が心に「思ふ人」ではあ

つても、まだ具体的な形を取るに至っていない相手であるが故に「我が思ふ」人」と把握しているのであろう。

イの「たまさかに」の歌は、偶然ある機会に目にした(出逢つた)人が忘れられずに、その相手にもう一度逢う機会が得られないものかと願う歌である。「たまさかに」、「ほのかに」見た人などへの一方的な(相手に知られぬ)思慕、恋情を歌うのは相聞歌の類型である。これは「一目」見た人への恋情をいうものである。前の歌と同様、恋愛初期の歌といえようか。

次のウの解釈には揺れがあるが、本文・或本歌ともに「人」は相手のことと捉えておきたい。この解については、同じく「人に知らえず」の句をもつ次のような歌が参考になる。

エ いくばくも生けらじ命を恋ひつつそ我われは息づく人に知らえず
ず(12・二九〇五)

オ おのがじし人死にすらし妹に恋ひ日に異けに瘦せぬ人に知らえず(12・二九二八)

いずれも修飾語をもたない単独の「人」の例である。これらの「人」についても「他人」と解されることがあるが、二九〇五番歌について『考』が「思ふ人にもしられず独恋のみする也」といい、近年の注釈書はどちらについてもおおむね「相手」と理解している。

二首が「命」「死」を代価とするほどに、そしてウの歌は「名を惜

し」むがゆえに、苦しい恋をするというのが、その懊惱する自ら
の胸中を披瀝する点で両者に違いはない。『考』がいきじくも指摘
したように、これらは片思いの辛さを訴える類型であろう。むろん、
第三者の「人」を意識することも相聞の常套であるが、そうである
からこそヒト（他人）に知られずに相手を恋うとするのは、いわず
もがなの前提のほずである。オの歌が相手への思いを「妹に恋ひ」
と（我―妹）の関係で示しながら、その思いに振り向いてもくれな
い当の相手を「人に知らえず」ともいうところに、片思いのあり方
がよく表現されているといえよう。異伝の「人には言はず」が意味
の相違にまで及ぶのかどうかに問題が残るが、これを含めて、これ
らの「人」は基本的に「相手」のことと捉えておきたい。^④

以上、早い時期の事例として人麻呂歌集相聞歌における「人」の
用例に即して見てきた。(1)自分の意中の相手を「我が思ふ人」と捉
え、誘いかける例（ア）、(2)思いがけずに見た相手を「人」と捉え、
また逢いたいと願う例（イ）、そして、(3)自分の思いを知らない相
手を「人」と捉え、一途な思慕の念をいう例（ウ）のように、三首
三様の表われを確かめえた。

三 修飾語を通して見る「人」

相聞歌において相手を「人」と呼ぶことがいかなる位相の表現と

して捉えられるのか、そのことをさらに探るために、呼称「人」に
はどのような修飾語がついているか、つまり「人」はどのように限
定される傾向があるのかについて考えよう。むろん、歌の場や状況
により多様な修飾語が付くのだが、細かな差異をあえて捨象し大ま
かに括ると、おおよそ前節に見た三つの型になるのである。そこで、
(1)思う相手を一般的に指す場合、(2)恋愛の初期の相手を指す場合、
(3)片思（片恋）の相手を指す場合の三つの型に分けて歌を示し、ま
ず作者未詳歌を中心に考察し、その後で記名歌を考察していこう。
なお例示歌の掲出法は作者未詳歌は巻毎の順とし、記名歌（巻四中
心）はその後に掲出するものとする。

三一(1)

まずはじめは、〈思う相手を一般的に指す場合〉である。キーワ
ードとしては「思ふ人」「恋ふる人」などに集約される型である。

(1)〈思う相手を一般的に指す場合〉……「思ふ人」「恋ふる人」型

*ア「前掲」「我が思ふ人」（11・24五七、人麻呂歌集）

カ 春日野に浅茅標結ひ絶えめやと我が思ふ人はいや遠長に

（12・30五〇）

キ 波のむた靡く玉藻の片思に我が思ふ人の言の繁けく（12・

三〇七八）

ク 思ふ人來むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かましを

(11・二八二四、問答)

「玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と居りせば (11・二八二五)」

ケ 思ふらむその人なれやぬばたまの夜ごとに君が夢にし見ゆる【或本の歌に曰く、「夜昼といはず我が恋ひ渡る】(11・二五六九)

コ 春雨の止まず降る降る我が恋ふる人の目すらを相見せなくに (10・一九三二)

「我妹子に恋ひつつ居れば春雨のそれも知ること止まず降りつつ (10・一九三三、答歌) 一

* * *

サ 月草のうつろひ易く思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ (4・五八三、坂上大嬢)

(1)の諸例には、「人」の内容について一定の傾向を見ることはできない。同じ「我が思ふ人」の三例が、それぞれに(まだよくは知らない意中の相手)を指示するア、(永遠の愛を誓う相手)を指示するカ、(片思いの相手)を指示するキというように、「人」と呼ばれる相手と歌い手(主体)との距離関係はいちようではない。恋愛の初期の相手を指す場合(ア)もあれば、関係が進行中の相手を指す場合(ク・コ)もある。ク・コは括弧内に示した答歌により恋愛

の状況が知られる。一般的、慣用的に意中の相手や恋慕する相手をいうのが「思ふ人」「恋ふる人」であったといえよう。その際、「人」の語は「恋ふ」よりも「思ふ」と共起しやすいといえそうであるが、それが何を意味するかは不明である。^⑤

三(2)

次は(恋愛の初期の相手を指す場合)としてほぼ括弧することができそうな群で、「一目見し人」「おほほしく見し人」のキーワードに代表される型である。

(2) (恋愛の初期の相手を指す場合) …… 「一目見し人」「おほほしく見し人」型

く見し人」型

*イ「前掲」「たまさかに我が見し人」(11・二三九六、人麻呂

歌集)

シ 夕月夜 暁闇のおほほしく見し人故に恋ひ渡るかも (12・三〇〇三)

三〇〇三)

ス 一目見し人に恋ふらく天霧らし降り来る雪の消ぬべく思はゆ (10・二三四〇)

ゆ (10・二三四〇)

セ はだ薄穂には咲き出ぬ恋を我がする玉かぎるただ一目のみ見し人故に (10・二三二一)

み見し人故に (10・二三二一)

ソ かくしてぞ人の死ぬといふ藤波のただ一日のみ見し人故に (12・三〇七五)

(12・三〇七五)

タ すぐき取る海人の灯火外にだに見ぬ人故に恋ふるこのころ

(11・二七四四)

チ 紅の薄染の衣うすぞめ浅らかに相見し人に恋ふるころかも (11・二九六六)

九六六)

* * *

ツ 朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひ渡るかも (4・五九九、笠女郎)

五九九、笠女郎)

テ 春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも恋ふるものかも

(4・六七七、中臣女郎)

ト はつはつに人を相見ていかにあらむいづれの日にかまた外

に見む (4・七〇一、河内百枝娘)

ナ み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる (4・七二〇、安都扉娘)

七二〇、安都扉娘)

この群には(ほんやり、あるいは一目見た相手)を一方的に思慕するといふものが多く、次項(3)で顕著に表現される片思いの情に通じる側面もなくはないが、どちらかといえば、恋愛初期の心情を歌っている例が多い。(2)のキーワードとして「おほほしく見し人」、「ただ一目見し人」があるのもそのことを物語る。「おほほしく」見た人への思いは、人麻呂歌集にも、

a 香具山に霞たなびきおほほしく相見し子らを後恋ひむかも

(11・二四四九、人麻呂歌集／非略体)

b 雲間よりさ渡る月のおほほしく相見し子らを見むよしもが

も (11・二四五〇、人麻呂歌集／非略体)

などとあつて、以後、集中では一つの類型をなしていく。これらは、

a について『童蒙抄』に「おほ、しく、おほろく」に、確かにあら

ね共あひ見し女を恋ひんか也。(中略)さだかにも見ぬ人を後々

迄かく恋ひん事かもと云意也」とあるように、ほんやり、ちらつと

見た相手に恋心を抱くようになってしまったことをいう類型として

把握できる。呼称「人」に関わらず類歌を掲げてみる。

c 春霞山にたなびきおほほしく妹を相見て後恋ひむかも

(10・一九〇九)

d おほほしく君を相見て昔の根の長き春日を恋ひ渡るかも

(10・一九二二)

e しろたへの袖をはつはつ見しからにかかる恋をも我はする

かも (11・二四一一、人麻呂歌集／略体)

f 山のはを追ひ出づる月のはつはつに妹をそ見つる恋しきま

でに (11・二四六一、人麻呂歌集／略体)

g 花ぐはし葦垣越しにただ一目相見し子故千遍嘆きつ (11・二五六五)

h あしひきの山鳥の尾の一峯越え一目見し子に恋ふべきもの

か(11・二六九四)

i 玉ほこの道行きぶりに思はぬに妹を相見て恋ふるころかも
(11・二六〇五)

これらにおいても、「おほほしく」「はつはつに」「ただ一目見し」相手に、これほど恋慕することになったとの嘆きが共通している。ただし、この類型の解釈は、時として二つの方向に別れることがある。人麻呂歌集歌のaについて、沢瀉『注釈』は「ほのかに妹を相見ただけで」と理解する。稲岡『全注巻十一』に(オホホシは)この場合は「香具山に雲居たなびき」を承け、香具山がほんやりと見えることをあらわし、第四句以下につながる際には、ほのかに一寸見た意味で「相見し子ら」にかかっている」というのが詳しい。これに対して、巻十のcの歌について阿蘇『全注巻十』は、「ほのかにあの子と逢って」と解している。『全注巻十』はまた、「男が初めて相逢つた女と別れしなに、女に贈つた歌と思はれる」、「おほほしく」は大体灯のない所で逢つたからで、当時にあつては普通のことであつた」とする窪田『評釈』を引いて、「ほの暗い光のもとでの短かい心残りの多い逢瀬を、『おほほしく妹を相見て』と言つたもので、初めて逢つた時でなくてもよい」としている。もし『全注』のような解釈だと、bの人麻呂歌集歌に「おほほしく相見し子らを見むよしもかも」とある表現が理解できなくなる。この歌は

六

〈おほろげに見たあの娘をもう一度はつきりと見たい〉という歌だからである。そのことは、前掲イの人麻呂歌集歌、「たまさかに我が見し人をいかにあらむよしをもちてかまた一目見む」によつても裏づけられるはずである。

さて、ほんやり、あるいは一目見た相手に対する思いの内実はa～i群によれば、もう一度見たいという願望(「見むよしもかも」b)、恋い慕うさまの叙述(「恋ふるころかも」i)、これから恋うことになるのだらうという予想(「後恋ひむかも」a・c)など、さまざまだが、これらは自分の気持(恋情)を訴えかける恋愛の初期の歌とみなしてよい。まだよく知らない相手に、真摯な思いを届けることに目的があるのであろう。この種の類型に「人」の表現の多いのも、そこに過半の理由があると思われる。その傾向は、そのまま記名歌の群にも持ち込まれているといつてよいだろう。

三―(3)

最後に〈一方的に思いを寄せる相手を指す場合〉として捉えられるもので、人麻呂歌集歌では「人に知らえず」がキーワードであったが、修飾語に留意して傾向を類別すると、「相思はぬ人」に代表される型でもある。相手に知られず、また思つてもくれない相手を一方的に恋うとは、いわば片思い(片恋い)の類型といつてもよい。(3)〈一方的に思いを寄せる相手を指す場合〉……「相思はぬ人」型

*ウ 「前掲」 「人に知らえず（恋ひ渡る）」（12・二八六一、人麻呂歌集^⑥）

ニ 相思はぬ人の故にかあらたまの緒長く我が恋ひ居らむ（11・二五三四）

又 相思はぬ人を思はく水ならば 柵越して行くべく思ほゆ（11・二七〇九「或本歌」）

ネ 卯の花の咲くとはなしにある人に恋ひや渡らむ片思ひにして（10・一九八九）

ノ いとのきて薄き眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ人かも（11・二九〇三）

*

*

ハ 相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後へに額つくごとし（4・六〇八、笠女郎）

ヒ 相思はぬ人をやもとな白たへの袖漬つまでに音のみし泣かも（4・六一四、山口女王）

フ 思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふる我かも（4・六八二、家持↓交友）

ヘ つれもなくあるらむ人を片思ひに我は思へば苦しくもあるか（4・七一七、家持↓娘子）

この群のキーワードは、「相思はぬ人」（自分は思っているのに、

『万葉集』 相聞歌の一位相

こちらを思ってくれない人）に集約される。万葉の恋は男女が「相思ふ」（お互いの思いが通じ合う）ことよって成り立つ。したがってこれらの歌は事実関係はどうあれ、歌い手の主観において片思いとみなされる意識の表現であり、ネの「片思ひにして」はそれが直接表出された形である。「卯の花の咲くとはなしにある人」とは、「卯の花が咲くように、咲く（はつきりと思いを言動に表わす）こともなくためらっている人」である。花が咲くことに恋の思いの状態や言動を重ねる比喩表現の歌は多くあり、「隠りのみ恋ふれば苦しなでしこが花に咲き出よ朝なきな見む」（11・一九九二）などの、「咲き出づ」も（相手に向かって意志・行動をはつきりと示すこと）の比喩表現である（なお、11・二二七五、二二八三、二二八五、二二一〇など参照^⑦）。

「人」の表現に関係なく、この群のキーワード「相思はぬ」を含む歌を並べてみよう。

j 相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮さむ（10・一九三四、春相聞／問答）

「春去ればまづ鳴く鳥のうぐひすの言先立ちし君をし待たむ（10・一九三五）」

k 相思はずあるらむ子故玉の緒の長き春日を思ひ暮さく

（10・一九三六、春相聞／問答）

l 相思はず君はあるらしぬば玉の夢にも見えずうけひて寝れど (11・二五八九)

m 相思はず君はまさめど片恋に我はそ恋ふる君が姿に (12・二九三三)

n 相思はずあるものをかも菅の根のねもころころに我が思へらむ (12・三〇五四)

これらでは相手は「妹」「子」「君」などと把握される。しかし全体の歌い方の方向において、相手を「人」と捉える場合と決定的な違いがあるわけではない。やはり相手のことが一日中ずつと(j)、つづくくと(n)思われ、そして片恋のまま(m)慕い続けようというのである。掲出歌のうち、jは歌われた状況がやや明確である。「問答」部に配列されているため、括弧内の答の歌と並べることで、当該歌の「相思はぬ」と歌うことの意味合いが見えるのである。つまり、答の歌の「言先立ちし君を相待たむ」の言い方からすると、相手の女性は男を拒否しているわけではない。とすれば男性の歌は、むしろ相手の女性の心を諳るためのレトリックとみるべきであろう。長い春の日をあなたに恋い焦がれ続けていますと訴えるのである(同じ句をもつkは類歌)。

そのような例がある反面で、mの歌には「片恋」とあるケースもあるなどして、当事者の状況はさまざま推定できるけれども、一方

的な恋の思いを表現する類型と位置づけて誤らないと思う。その関係性の中で呼称「人」が多用されていることが指摘できよう。これら相聞歌の類型もまた、家持圏内の「片恋」の歌に連続する性格のものであったと予想される。

四 家持周辺の歌群における「人」

作者未詳歌を中心とする前節までの考察を踏まえて、以下には大伴家持周辺の女性に関連する歌について考えよう。というのも、記名歌に特徴的なこととして、(2)項で、笠女郎(ツ)、中臣女郎(テ)、河内百枝娘子(ト)——厳密には修飾語のない単独「人」の用法だが、前後で限定が加えられるので、同列に扱う——、安都扉娘子(ナ)の例など、家持周辺の女性が集中して「人」を用いているからである。さらにその傾向は(3)項でも同じであり、笠女郎(ハ)、山口女王(ヒ)、そして家持(フ・ヘ)の例、その他に巫部麻蘇娘子(4・七〇四、後掲メ)の例など、家持を含め彼の周辺の女性の歌が浮かび上がってくる。しかも重要なのは、上記の女性たちの歌で贈り先が記されないのは安都扉娘子と巫部麻蘇娘子の場合のみで、あとは家持に贈られた歌であるという事実である。家持周辺の女性の相聞歌においては、相手を「人」と呼ぶ流行があったかと思われるほどの現象なのである。その幾つかについて作者未詳歌群からの影

響があるだろうことも周知であるが、家持周辺ではむしろ意識的、自覚的に用いられていたかに思える。

まず、笠女郎の場合について見よう。笠女郎には「笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌二十四首」（巻四）があり、その中で女郎が用いる家持に対する呼称に、「人」の表現が六例（五九八、五九九、六〇〇、六〇二、六〇六、六〇八）ある。ちなみに「人」以外では、「我が背子」（五九〇）が一例、「君」（五九三・六〇四・六〇五・六一〇）が四例の合わせて五例のみである。この現象は、家持を時には親密な、時には疎遠な相手として把握する女郎の揺れ動く心のさまの一面を表しているともいえようか。それにしても、笠女郎の相聞が相手を「人」と呼ぶ関係ないしは意識を基盤に構成されていることは否めない。前掲のツ（五九九）、ハ（六〇八）以外を掲げておこう。

ホ 衣手を打廻うらまの里にある我を知らにそ人は待てど来ずける
（4・五八九、笠女郎）

マ 伊勢の海の磯もどろに寄する波恐おそき人に恋ひ渡るかも
（同・六〇〇、同）

ミ 夕去れば物思ひまさる見し人の言問ふ姿面影にして（同・
六〇二、同）

ム 我も思ふ人もな忘れおほなはに浦吹く風の止む時なかれ

『万葉集』相聞歌の一位相

（同・六〇六、同）

ことに、五九九（前掲ト）、六〇〇（マ）、六〇二（ミ）はほぼ連続して「人」を用いている（六〇一には呼称詞そのものがない）。女郎歌群の全体を六群に分ける伊藤博説^⑧によれば、五九九―六〇二は一群とされ、「人」がここに集中することが理解しやすい^⑨。またそれに続く六〇四、六〇五は共に「君」を用いるが、六〇六、六〇八ではまた「人」が用いられる。最後の二首（六〇九・六一〇）は「相別れて後に更に更に来贈る」（六一〇左注）とあるので、六〇八が実質的には贈答の最後の歌である可能性が高い。つまり中盤以降、女郎の歌は相手を「人」と呼ぶことによつて特徴的であるとさえいえよう。ただし、始めの方の五八九にも「人」が用いられているから、その特徴は女郎歌全般についてのものと見ることができよう。いま女郎歌群の詳しい分析は用意していないが、その歌群の基調音、とりわけ歌群終末部を彩るのは、思いが相手に通じることのないもどかしさと絶望感であろう。『釈注』が前掲ネ（六〇八）について、「結局、我が思いは片思いでしかなかったことをさらけ出して全体を結んでいる」と述べたことも想起される^⑩。

次に、山口女王の場合である。山口女王には、「人」を用いる歌（前掲ヒ）を含む「山口女王が大伴宿禰家持に贈る歌五首」がある。

① 物思ふと人に見えじとなまじひに常に思へりありそかねつ

る(4・六一三)

*② 「前掲ヒ」 相思はぬ人をやもとな白たへの袖漬つまでに音のみし泣かゆ(同・六一四)

③ 我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ(同・六一五)

④ 剣大刀名たちの惜しけくも我はなし君に逢はずて年の経ぬれば(同・六一六)

⑤ 葦辺より満ち来る潮のいや増しに思へや君が忘れかねつる(同・六一七)

五首は同時の作と考えられる。人目を忍ぶ恋に苦しみ①、袖を濡らして泣きつつ恋い②、当該歌、君に逢えない今はもう名の立つことさえ惜しくもないといひ③、せめて君の枕だけでも夢に見えてほしいと望み④、日増しに思うせいか君のことが忘れられない⑤」という展開は、ほぼ片思いの反復表現である。『釈注』は、巻四の笠女郎歌が「思ふ」の語を多用し、その「思いの起伏」を述べるところに特徴を見るとともに、その特徴が山口女王歌にも共通することを指摘し、「この歌群にも『思ふ』の語が多く、五首中四首を数える。片恋歌群と違ってよい」と述べている。この歌群はまさに〈片思〉を主題にしているといつてよく、それを直接的なキーワードで表現するのが「相思はぬ人をやもとな」②、「我が

背子は相思はずとも」④の連続する二首である。

中臣女郎にも「人」を用いる歌を含む、「中臣女郎が伴宿禰家に贈る歌五首」がある。

① をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも(4・六七五)

② 海の底奥ちきを深めて我が思へる君には逢はむ年は経ぬとも(同・六七六)

*③ 「前掲・夕」 春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも恋ふるものかも(同・六七七)

④ 直に逢ひて見ればのみこそたまきはる命に向かふ我が恋止まめ(同・六七八)

⑤ 否と言はば強ひめや我が背骨の根の思ひ乱れて恋ひつつあらむ(同・六七九)

当該歌③では相手を「知らぬ人」といつている。「知らぬ人」にいつては諸注「逢ったことのない人」と理解する。澤瀉『注釈』に「未知の人の意。見ぬ人といふに同じ。その人がどういふ人であるかといふ『知識』は持つてをり、消息も通じあつてゐても直接に逢つたことの無い人が「知らぬ人」である」という。「求愛の歌はもらつていても、逢う機会はまだ持つていない相手」ということである。なお、夕の「おほほしく」は前掲シ、a ~ dなどとは異なる。

なり、見た（出会った）相手を修飾するのではなく、上二句の序詞からの続きでは、対象がはつきりとは見えない様子を、係ってゆく結句との関係では、（頼りなく、うっとりしいさま）、つまり自らの心の状態をいうと思われる。

この「知らぬ人」について、『釈注』は「家持は、中臣女郎にあって、実際に『知らぬ人』であったのではあるまい。さような状況設定でうたつて効を納めたところにこの歌群の評価を見るべきであろう」という。つまり、この場合も一方的な思いという主題が設定されていると覚しい。五首に沿って見ると、まず「かつても知らぬ恋もするかも」（思いもかけず今までしたことのないような恋に陥ってしまった）（①）と訴えかけ、「奥を深めて（心の奥深く）」思う「君」にいつかは逢いたいものだと言意を述べ（②）、そして当該歌③が「知らぬ人にも恋ふるものかも」の慨嘆である。続く四首めでは「直に逢ひて見れば」こそ我が恋は止むだろうといひ（④）、最後に、ひたすら「思ひ乱れて恋ひつつもあらむ」（⑤）と言って、いわば片思いを自認するような歌で結ばれている。やはり、一貫して「片思」の情調よつてゐることからすると、③の「人」の用法は自然で、⑤の「我が背」がむしろ際立っていて異様であるが、それはせめて相手を「我が背」と呼ぶことで、「恋ひつつもあらむ」という心理的な繋がり強化したいとする願望の現れであろう。

沢瀉『注釈』に「以上の五首いづれも先行の詞句によるところがあり、或いは強く或いは弱く訴へてゐるやうであるが、その訴に反響の予期されないものが感ぜられるのは、これもまた『戯歌』に類するからでなからうか」と指摘する。よく知らない相手に恋心を抱き、仮に相逢うことがかなわなくとも恋いつつという片思いの嘆きを演じた歌であろう。

以上、相手を「人」と呼ぶ歌を歌群の中に戻してみることで、家持周辺の女性たちの歌の位相の若干が明らかになつたと考える。

五 演じられる相聞歌

家持圏の相聞歌の「遊びとしての恋」のあり方については、かつて橋本四郎氏が佐伯赤麻呂と娘子の贈答に即して精緻に分析されたことがある。そこでも触れられたように、河内百枝娘と巫部麻蘇娘子の歌についても同様の問題がある。そしてそこにも、「人」の呼称が深く関連する。

河内百枝娘子が大伴宿禰家持に贈る歌二首

*ト「前掲」はつはつに人を相見ていかにあらむいづれの日に
かまた外に見む（4・701）

ぬばたまのその夜の月夜今日までに我は忘れずま聞なくし思へ
ば（同・702）

巫部麻蘇娘子が歌二首

我が背子を相見しその日今日までに我が衣手は干る時もなし

(同・七〇三)

メ たく繩の長き命を欲りしくは絶えずて人を見まく欲りこそ

(4・七〇四)

橋本論はこれについて、「一度の出逢いが忘れられない」ということと『今日までに』の共有」という点から、「七〇二と七〇三が近似し」、「相手を三人称でさしながら逢いたいと願う気持において七〇一と七〇四は通じる」として、四首の連携を指摘して、「はつはつの出逢い」をテーマとする歌群」と捉えた。さらに『釈注』もこれを承けて、「家持を交えた場で恋を主題に詠まれた歌群がこの四首であったにちがいない」と推測する。なお「河内百枝娘子、贈大伴宿禰家持歌二首」、「巫部麻蘇娘子歌二首」という題詞の形式の違いが気掛かりではあるが、この緊密な対応からするに、二人の歌が全く無関係であったとは思われない。

また例えば、巻八「秋雑歌」の「巫部麻蘇娘子が雁がねの歌一首」(一五六二)と「大伴家持が和ふる歌一首」(一五六三)、「日置長枝娘子が歌一首」(一五六四)と「大伴家持が和ふる歌一首」(一五六五)の二組の贈答の場合がある。村瀬憲夫氏は、前者が「娘子が雁の妻呼ぶ声にことよせて家持の気を引こうとしたのに対して、

家持が焦点を少々ずらせながらそれに『和』えた歌」であり、後者も「少々噛み合っていないくらいはあるものの、紛うかたなき相聞の歌」であるという。ところが、巫部麻蘇娘子と家持の間には同じ巻八「相聞」部の一六二番と、巻四「相聞」部の七〇三・七〇四番にも贈った相手が記されない歌がある。村瀬氏はこのような処置(歌の配置)について、家持がそれらの作歌状況を知悉していたからだという。そしてそこから、上掲の二組の作者(娘子)たちは、家持にとって「現実の恋愛の相手ではなかったのではないか」と結論するとともに、そこに「余裕・遊び・虚構の相聞歌」を想定しておられる。きわめて示唆的な論である。

見てきたところ、家持に対する女性たちの歌は、「一目」「おほほしく」見た相手に牽かれ思慕する恋であったり、一方的な片思いであったりと、いちようにある傾向を持っている。そして、そこに深く関係して「人」の表現が顕在化していることも確かめられた。家持周辺の相聞のあり方を「片恋文化圏」と象徴的に呼んだのは伊藤博氏^⑤であったが、「人」の呼称の特徴的な表われ方と、このような演じられる片思いの表現とは不可分であったといえる。

その一部にはすでに触れたが、「片思ひ」の語を直接詠みこんだ十一首に限って相手を呼ぶ詞を検討すると、次に*印で示すように、「人」の表現が四例ある。

作者未詳歌：10・一九一〇、*一九八九、11・二四七二、二五二五、二七九八、*12・三〇七八

記名歌 ……4・五三六、七〇七、*七一七、七一九、*18・

四〇八一

内訳は作者未詳歌に前掲キ(三〇七八)・ネ(一九八九)の二例、家持園内の歌に前掲へ(七一七、家持)、そして

モ 片思を馬にふつまに負ほせもて越辺に遣らば人かたはむかも(18・四〇八一、坂上郎女↓家持)

の二例である。ちなみに、他にはいっさい呼称詞が用いられていない。このような傾向は、「片恋」の語を詠みこんだ九首(2・一七、2・一九六「挽歌」、3・三七二、8・一四七二、17・三九二九、11・二七九六、二八一五、12・二九三三、三一一一)についても同じであり、「君」の語二例、「子」の語一例の計三例の他に、呼称詞は使用されない。この現象は、相聞において相手を指して呼ぶ「人」の位相をよく示すであろう。こちらの思いに対して「つれもなく有る」相手が「人」と呼ばれるのである。

《我と汝》の関係において相手を「人」と呼ぶことは、人麻呂歌集の時期からあった相聞歌の表現方法と見てよさそうである。そして、それ以降(万葉後期)になると、一目見た人への思いや一方的

な思いを伝える歌の中で、集中的、慣用的に用いられるようになる。さらにその趣向が意識的、自覚的に活用されていく傾向は、わけても家持周辺の女性たちの《恋歌》の生産と享受の動態の中に想定されるように思う。

注

- ① 伊藤博「万葉集の表現と方法 下」(一九七六年、塙書房)。第十章第一節。二二〇頁。
- ② 注①に同じ、二二〇―二二二頁。
- ③ 品田悦一「万葉和歌における呼称の表現性」『万葉集研究』第十六集、一九八八年、塙書房。
- ④ 『釈注』が本文歌について「他人、世間の人の意と思われる」とし、異伝歌について「親兄弟など、親しい第三者か。恋する相手とも考えられる」とするが、根拠は示されない。
- ⑤ 佐藤武義氏は「思ふ」と「恋ふ」の語義の違いを説かれるが、今それには触れない(『万葉語としての「片思」「片恋」』『日本文芸思潮論』、一九九一年三月、桜楓社)。
- ⑥ 前掲ウの人麻呂歌集歌はこの型に対応するが、「人に知らえず」(前掲エ・オ)や11・二七三七、13・三二五六(反歌)、4・五八九(笠女郎)など修飾語を伴わない単独形で表われる。
- ⑦ 拙稿「色に出づ」考「慣用句と発想法」『万葉』九十二号。
- ⑧ 伊藤博「万葉集の歌群と配列 下」(一九九二年、塙書房)第八章第二節、及び「釈注」参照。
- ⑨ これは女郎歌を構造的に見る諸説の中では、「慨嘆期」(小野寛「笠女郎

郎歌群の構造」『万葉集歌人摘草』一九九九年、若草書房。初出、一九七〇年）、「燃えさかる炎」「燃え残る炎」の時期（山崎馨「笠女郎の歌」『万葉集を学ぶ』第三集、一九七八年、有斐閣）と捉えられる。

⑩ 注⑧の前掲書でも「この一首はまた、第一群以来うたいつづけてきた二十四首の思いの結論でもある」とされる。

⑪ 小野寛「万葉集卷八と卷三・四・六―その共通作者と重出歌―」『国語と国文学』四六卷一〇号。

⑫ 阿蘇瑞枝「万葉集の女歌―大伴坂上郎女とその前後―」『上代文学』七十六号、一九九六年四月。

⑬ 橋本四郎「暫聞歌人佐伯赤麻呂」『上代の言語と文学』、一九七四年、前田書店。

⑭ 村瀬憲夫「大伴家持の相聞歌」『うたの発生と万葉和歌』、一九九三年十月、風間書房。

⑮ 注①に同じ、第十章第一節。